

秦野の奈良・平安時代



奈良・平安時代の秦野市は、相模国の余綾郡、足上郡、大住郡の一部で構成されていたと考えられています。これまでは、市内南東部を中心に集落が展開していることが明らかにされていましたが、近年のかながわ考古学財団の発掘調査によって、市内北西部においても集落が展開している傾向がわかってきました。

今回は秦野の雅な奈良・平安時代の世界を、ご紹介したいと思います！

三廻部東耕地遺跡

三廻部東耕地遺跡では、現在のところ 12 軒の竪穴建物が確認されています。ほとんどの竪穴建物では、北側または東側にカマドが構築されていました。カマドの構築材には多くの礫が使われていることが特徴として挙げられます。

H9号竪穴建物では、柱のように両脇に石を立て、大きめの礫を横に渡して焚き口を作っています。礫が焼けている状態ではないため、礫の周りは土で覆われていたと考えられます。煙を外へ出す煙道の上部にも細長い礫を並べ、天井としている状況も確認できました。

H1号竪穴建物のカマドでは、煙道には煮炊き用の甕の底を打ち欠いて重ね合わせ、煙突のように使用している例も見つかりました。



柳川竹ノ上遺跡

柳川竹ノ上遺跡では 14 軒の竪穴建物が発見されました。そのうち、9世紀代と考えられる H2 号竪穴建物の壁際からは、多くの土師器の甕や坏と共に、鉄製の鋤先がほぼ完形で出土しました。長さ 21 cm、幅約 20 cm、重さは約 400g あります。

スコップのような道具の先端にはめ込んで使っていたようですが、木製の部分は残っていませんでした。奈良・平安時代は、鉄製品を溶かして再利用していたため、このように完形で出土する例は少なく、極めて稀な資料です。



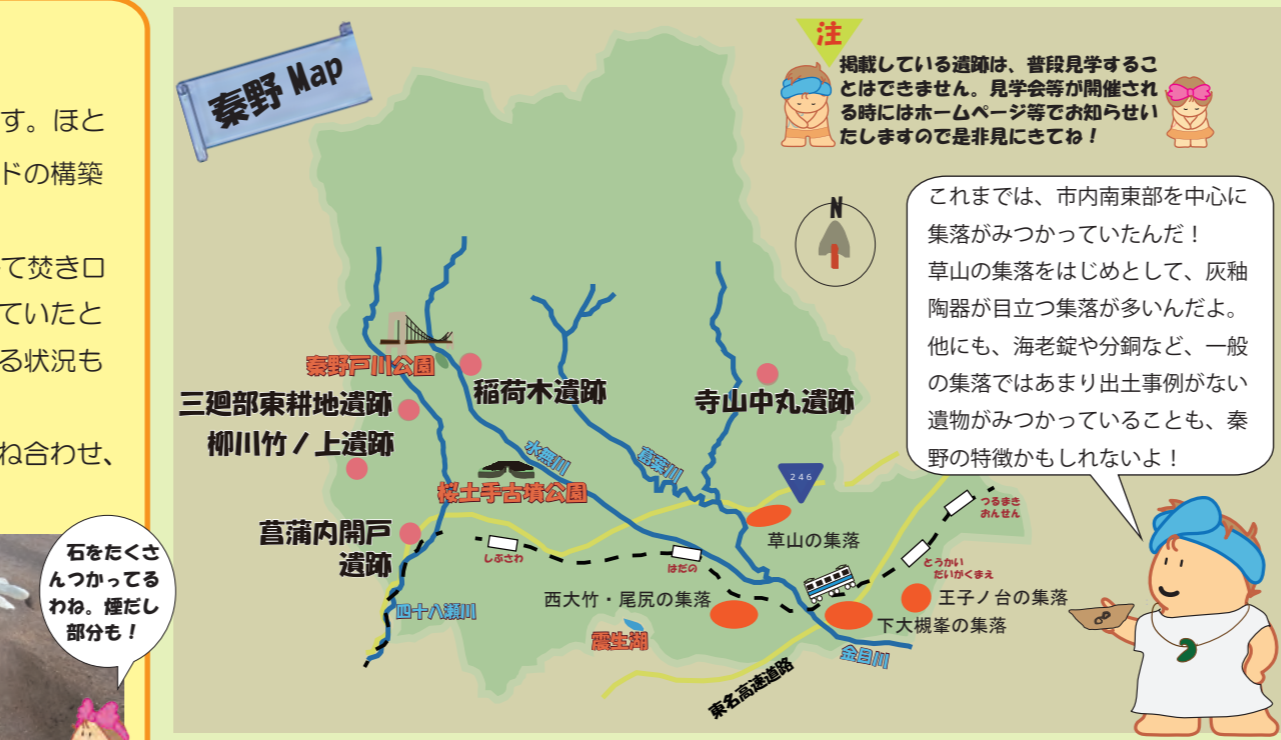
「発掘帖第 25 号」にも詳しく載ってるよ！

※ 1～4 の遺物写真は神奈川県教育委員会蔵資料です。

すいぶん、深いおうちだね！

区画のための溝かな？

※ 1



稲荷木遺跡

稲荷木遺跡では、平安時代の竪穴建物が約 60 軒発見されています。建物は重なり合うものは少なく間隔を空けていることから、ほぼ同時期に営まれていた集落と考えられます。

H3号竪穴建物は水無川沿いの平坦面に位置し、壁際に柱穴を有しています。他の竪穴建物に見られるカマドは認められず、床面では焼土・炭・灰が伴った炉を複数具えていることが特徴です。さらに床下から海老錠と呼ばれる錠前が出土しています。床下から出土していることから地鎮などに伴うものと考えられます。海老錠は大規模な集落や奈良・平安時代の役所などの遺跡で出土する傾向があり、集落の性格づけを考える上で重要な出土遺物です。



寺山中丸遺跡

平成 25～28 年度に調査した寺山中丸遺跡では、舌状台地上の縁辺部に平安時代（9世紀後半～10世紀前半）の遺構・遺物が確認できました。およそ 5 棟の掘立柱建物と 25 軒の竪穴建物とともに、墨書土器「油坏」「城」「本口」や灰釉・緑釉・三彩陶器、瓦塔、鉄鍬、針状鉄製品や椀形鉄滓など、一般の集落と比べ特徴的な遺物が出土しています。搬入品も出土しており、工人としての生業をもった人々とともに宗教的な一面を備えた集落と考えられます。これらのことから、市内の奈良・平安時代を考えていく上でも重要な遺跡といえます。



菅蒲内開戸遺跡

菅蒲内開戸遺跡では、奈良・平安時代の遺構として竪穴建物 2 軒、掘立柱建物 13 棟などが確認されており、周辺が居住域として利用されていたことがわかっています。また、幅 3～5m にも及ぶ溝状遺構が検出されており、なんらかの大きな区画が存在した可能性が考えられます。



ちょっと注目！！

「菅蒲内開戸遺跡出土の墨書」土器破片のため全文は不明ですが、坏底部外面に記された 2 文字は「足上（あしかみ）」とも読めます。遺跡が所在する秦野市菅蒲は奈良・平安時代には足上郡に属していたとも言われ、当時における土地の帰属を考える上で注目される資料です。



郡名を書いているなんてすごいね！